

保育方針を伝えるための手がかりとして

～絵本「ラチとらいおん」を通して～

保育の世界にかかわらなければ絵本の世界に出会うことなかったと思います。絵本を通して、特に子どもや保育のことを考えさせられた本は深く印象に残っています。

絵本の定番といえる本ではあるのですが、この『ラチとらいおん』も、子どもの自立、特に親や保育者の役割を考える上で印象に残った本の一冊です。卒業や進級を迎えるこの時期に読むと、保育者は果たしてらいおんの役割を果たせただろうかと、感慨深いものがあります。



『ラチとらいおん』

文・絵 マレーク・ペロニカ
訳徳永康元 福音館書店

物語

物語は、ラチという「世界中で一番弱虫」の男の子が、ちっぽけなライオンと出会う中で、徐々に強くなっていく姿が描かれています。らいおんがいなくてできない、らいおんにはいつもそばにいてほしい、ちょっとでもできるようになったら、らいおんに認めてほしいなどと、弱虫なラチは何かとらいおんを頼るのですが、ある時から、らいおんがいなくても、強くなった自分に気づきます。そのときに、ポケットにいるはずのらいおんは消えていて、手紙が残されています。その手紙には、「きみはらいおんと同じくらい強くなった。ぼくはこれから弱虫の子どものところに行く。ぼくをわすれないでくれ。ぼくもきみのことは忘れない」といった文が残されています。

まさに、らいおんは保育者です。この時期だからこそ、改めてお子さんと一緒に読んでみてはいかがでしょうか。